

“学びをひろげるわたしと〇（まる）人の会” 第 32 回研究会報告

JICA インクルーシブ教育研修ワークショップ

「障害者がみんなといっしょに学び合うことについて」

2020年1月18日 提案 松森俊尚（“学びの会”スタッフ）

いつも少人数で進めている“学びの会”ですが、この日は「わたしと『5人』の会」という、更に小さな小さな集まりとなり、さすがにこうなれば「人恋しさ」も感じたところです。

2014年から毎年JICAの上記ワークショップを続けてきました。今年も、12か国から15人の研修生が来日して、1か月余りを横浜を中心に日本のインクルーシブ教育について研修に取り組みました。その内、1週間足らずですが大阪の「ともに学び、ともに生きる教育」の研修プログラムが設定されて、その一日を“知的障害者を普通高校へ北河内連絡会”が担当して進めました。

特に今年度はこれまでの流れを大きく変えたワークショップを試みました。その概要（進行表）は以下のようなものです。“学びの会”では当日のビデオを見ながら報告しました——

1. Sさん（お母さん）から小学校3年生のユウくんの生い立ちとあゆみを語る

▼ロールプレイゲーム①

みなさんは、それぞれA,B,Cの小学校の教員です。

お母さんは、3年生になって、ユウくんをすべての授業で
みんなと一緒に教室で過ごさせたいと、要望しました。

お母さんの要望に対して、それぞれの学校は次のような結論を出しました。

A：この学校ではなくて支援学校へ行くことが、ユウくんのために一番いい。

B：教科によって、支援学級と普通学級と両方を使いながらやるのがよい。

C：すべての時間、みんなと一緒に普通学級で勉強し取り組むのがよい。

なぜ、そういう結論になったのか？

▼グループで話し合い 【5分】

▼各グループの意見を聞きながら、交流。【20分】

2. Tさん（お母さん）から、高校生のコウタさんの現状を語る。

▼ロールプレイ・ゲーム ②

みなさんは、それぞれコウタさんが在籍しているA、B、Cの高校の教員です。

コウタさんは、校内テストで30点の「基準点」に満たないので、進級を認められず、3回目の1年生を過ごしています。

お母さんは学校に「進級させてほしい」と要望を上げました。

お母さんの要望に対して、それぞれの学校は次のような結論を出しました。

A：点数がとれなくても、進級、卒業を認める。

B：このままでは、本人がつらいので、退学か、支援学校への転学をすすめる。

C：「基準点」に少しでも近づけるように、工夫しながら努力する。

なぜ、そういう結論になったのか？



▼グループで話し合い 【5分】

▼各グループの意見を聞きながら、交流。【20分】

3. Iさん（お母さん）から、ユウタロウさんの中学校卒業までの歩みを語る。

ユウタロウさんは、「みんなと一緒に高校へ行きたい」と高校を受験します。
みなさんの国の学校だったら、どうしますか？

▼ロールプレイではなく、それぞれ自分の意見で話し合ってください。【10分】

4. 映画『風は生きよという』別バージョンを映す。【8分】

高校生活、クラブ活動、学会発表など。

▼フリーディスカッション 【10分】

5.ユウタロウさんと対話しよう！【10分】

優太郎さんの表情を、ビデオカメラからスクリーンに映しながら。

※前に出て、ユウタロウさんを囲みながら。

6.コーディネーターのまとめ 【3分】



——インフルエンザが流行していた渦中で、発表者が当日来られなかったり、遅れて参加したりで、急ぎょ代役を立てたりとハプニングが重なって、時間配分が予定通り行かず「3」のところまでのワークとなりました。予定の進行が変わるのは全く構わないのですが。

1. 2のロールプレイは、時間が経つごとに活発な発言が生まれ、ジェスチャーも交えながらのディベートに発展して行きました。3のフリートークで

は、各自が自分の国の現実や経験と重ねながらの発言となり、「私の国では、重度の障害を持った子どもは早く亡くなってしまいます。ユウタロウさんのように成長することはできません」と話しながら、声をつまらせてしまう場面もありました。

進行役であった私（松森）は、3のフリートークをもっと時間をかけてじっくり話し合い、聞き合う場面にできればとの反省を出しました。

「ロールプレイが必要だったのかどうか」が議論になりました。ディベートが形式的になりすぎて、肝心の「一人ひとりの意見や考え、思い」を聞き合い話し合う時間がなくなってしまったのではないかと。

上田さんは、毎年子どもたちを集めて4泊5日で沖縄、奄美を回り、平和学習や集団生活をする「少年の船」(?)の取り組みを紹介しながら、いっしょに飯を食い、遊び、生活をする中で「テッチャン」と呼んでくれるようになる。上田さんが自分たちと違って食事にスプーンやフォークが必要なことを知り、自然に介助してくれるようになって行く。「わかり合う」ということは、長い時間を「関わりあう」ことだと発言しました。

松井さんは次のような「まとめ」を出してくれました——

松井直哉

何となく違和感を覚えながら、適当に松森氏に噛みついてしまった。

私はJICAの活動にはあまり興味がない。また松森氏の普段の活動のフィールドはほとんど知らない。なのにどこに違和感をおぼえたのだろうか。

まず「先進国」「発展途上国」という言い方に私はかなり嫌悪感を持ってしまう。どういう意味での「先進」でまた「発展途上」なのか。そのベクトルは人間に幸福をもたらすベクトルかどうかは何をもって判断するのか。

私は欧米の、そしてそれに追随する日本の価値観があまり好きではない。何となく「自然」や「他者（他民族・他国家）」を「征服」しようという発想が根底にあるような気がするから。（過酷な生存競争を経たからそうになってしまうのも理解はできるが）欧米人や日本人に征服され駆逐された、例えばアメリカ原住民の人々、例えばマヤの人々、例えばアイヌの人々などは「自然」や「他者」を征服するのではなく敬意をもって「共存」する道をさぐるという発想が強かったのではないだろうか。そして勝ち負けで言えば「征服」する意図を持つ者が「共存」する意図を持つ者を征服していったというのが世界の歴史の流れだと、私はごく大雑把にかつ乱暴に捉えている。

そんな風に「自然」だけではなく「他者（他民族・他国家）」をも征服するために人類の文明は進んできたとなると「先進」はいいことなのか。先進するために人間にとって大切なものを捨ててきたのではないかという思いをぬぐいきれない。

JICAがなぜ発展途上国の方々を招いているのか、発展途上国の方々が先進国と言われる日本から学ぶのはなぜなのだろうか、という問題はこの際置いておく。しかし、先進国から様々な制度や技術を学ぶのは良しとしても、「教育」という分野では「先進国」から何を学ぶというのだろうか。

私は「教育」は「制度」や「技術」の問題とは思わない。制度や設備がしっかりしていなくても素敵な教育はある。教育技術に乏しいと言われる人の言動が子どもの心を揺さぶることはよくある。問題は何を願って教育するのかというベクトルの問題だと考えている。まして「インクルーシブ教育」を考えるにあたって日本の何を学ぶというのだろうか。日本の教育の現状は、そしてインクルーシブ教育の現状は、基本日本に蔓延する「隣人を大切にする暇があったら自分の能力を高めろ」という大きな流れの中にあって、あまりにも苦しんでいる隣人が目立ってきたので、ポーズだけでも隣人を大切にしよう、というレベルではないのか。



「インクルーシブ教育」を考える時、最初にしなければいけないことは、自分（たち）は「いかに隣人を大切にしているのか、またはいないのか。」「いかに隣人を愛しているのか、またはいないのか。」の検証ではないだろうか。

日本の教育制度が目指しているベクトルには、「他国との競争に勝つ人材を育てる」だの「個人の学力を高めることが個人や集団の幸せにつながる」というようなベクトルが含まれている。

しかも「そのためには個人主義的になっても構わない」という匂いがプンプンしている。「能力の高い者が能力の低い者を踏み台にするのもやむを得ない」という匂いもプンプンしている。そんな変なベクトルに突き進むための制度や技術、設備、施設が「先進」しているにすぎない。そこから何を学ぼうというのか。また日本は何を教えようというのか。私にはわからない。

日本人こそ素朴に隣人を愛する発想を持った国や人々から学ぶべきなのだと思う。――

私（松森）は“JICA インクルーシブ教育研修”を毎年楽しみにしています。それは、私にとって大きな学びの機会になっているという実感があるからです。せっかく JICA から依頼を受けた機会ですから、私が講演をして研修生が聞き手に回るという、「教える―教えられる」関係ではなく、「学び合う」関係の学習の場を作りたくて、ワークショップという「かたち」をとることにしています。研修生が聞き役になるのではなく、研修生の発言をできるだけ引き出したいと考えました。同時に、私たち日本人の側もいっしょに学べるように。

5年連続でスタッフを勤めてくれているユウタロウさんですが、「研修生との対話」の場面で見せる、「目の動き方・まぶたの閉じ方」（現在それが唯一のコミュニケーションの手段であると私たちが思っているのですが）、に毎年顕著な変化を発見して、私たちは1年ごとの成長を思い知らされることになります。

発表するお母さんたちにとっても、わが子の歩みを振り返り、いまを語りながら、自分の問いかけに研修生たちがグループで議論し、プレゼンをして、互いに話し合うのを聞くのは、なかなか刺激的な経験であろうと思います。一人ひとりの考え方の背景や、語られる言葉の端々、ニュアンスや表情ジェスチャーの一つ一つに、それぞれの国の実情と、各人の経験が込められているのですから。つまり私たちにとって日本人との交流の中では得ることのできない学習の機会です。



研修生たちは、母国と比べようもない大きな予算と施設設備の整った学校や施設を見学し、多数の専門家から講義を受けることになるのですが、せめて大阪の短い期間の研修で、「ともに学び、ともに生きる教育」に触れることによって、決して日本のインクルーシブ教育は進んでいるとはいえない、様々な考え方があり実践があるのだということを知ってほしいと、いつも思っています。

改めて、教育は人と人との関わりの中で営まれるものであるという原点を思い知らされます。